銀鈴

第三拾三號

明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）明治四十一年七月十日發行

こ
2-1
33～終刊(26)
河野氏 86752
購・寄・研・他 島根女子短大図書館

目次

朝開（長詩）……月森神來
わが妹（小品）……甲村紫蝶
青き花（短歌）……森脇桃村
書簡一則（書簡）……素陽生
夏木立（短歌）……菅原紅雨等
社告……社同人

朝開

月森神來

鐘鳴りぬ、嗚呼見よ東天の扉ゆ
威力の權化日輪は眼も眩むなる
金襴の裝束めして新らしき、
世をし治すと黄金の大四輪車を
悠々と軋らせてこそ出で給へ。

夢の領、沈默の境はた寒き
罪の住家の暗黑は高く嘶いて
躍り來る天馬の蹄に碎け散り
影を潜めぬ。萬物は空打仰ぎ

福音の金の投矢に射られぬる。

かかる時ああ我が心美しき
彩の羽ふるひ大空を舞もてそすれ。

鐘鳴りぬ。嗚呼今こそは新らしき、
希望の國の朝開。見よ人悉は、
來し方の寒き影にも微笑みて、
唯、一向に當來の榮華の影の、
憧憬に陶然として醉へるなり。

天地の有情の族いざ歌へ、

神に捧ぐる讃詩を。さて舞ねかし。
今見るは輝きわたる七彩の
希望の光。はた高き香にぞ薫れる
奇しき仙酒。ああ歌へ、あな樂し。

かかる折、ああ我が心囚はれの
鎖ゆ免れ、大空に昇りてそすれ。

（完）

わが妹

甲村紫蝶

うらゝかな朝の太陽は、燦々と街道を照して居

る。

自分は毎の如く、風呂敷を抱へ、自然木の洋杖をついて、青葉の繁つて居る心地よい道を來た。この道で向うから四五人の男女の、何か面白さうに話しながら來る群に逢つた。

と、見れば其の中の一人は、思ひ掛けない自分の妹――それは他家に居る――であつた。

「やあ、小杉さん！小杉さんぢやないか、珍らしいね、何處へ行つたんです。」と自分が先づ口を切つた。

「おや兄いさんなの、まあ。」と云つて驚いたが

「此頃は、此處の學校に居らつしやるの、チッと

も知らなかつたわ。――私、――温泉津へ行つてよ。」

羞しさうに俯向いて居た。餘り唐突に遭つたものだから、談話はあれやこれや取止もない。

彼とは異父兄妹の間柄である。母が我家を去つてから、再度の婚家で生んだ子であるから、逢ふことも稀であつた。それ故、我等の間には或は眞の兄妹といふ情愛がなかつたかも知れぬ。されど、自分には何故かこんな境遇に生ひ立つた彼がなつかしくつて堪らぬ。況して我には一人の妹ではないか。自分は何だか、悲しさと嬉しさとが胸一杯になつて、電氣にでも打たれたやうに

惘然とした。

『兄いさま――あの、始終お達者でムりましたか。』と愛らしい口元に震ひを帶びて云ふ。

ああこの瞬間、自分は云ふに云はれぬいとしさ不憫さを覺えて、染々と、親身の愛は、人間性情の奥深く根ざしてゐるものだと知つた。

自分は心ばかりの贈物を與へて、最後の言葉さへ交さず、唯、涙と涙を以て別れを告げた。云はぬは、云ふに、增る無量の思ひがある。再たび相會ふ時、妹よ、その美はしく健やかなる、仇ない今のおも影を失はざれ。遙かに彼の後ろ姿を見送つた。

（とはり）

青さ花

森脇桃村

三五人屋形船してにぎやかに皷をうちぬ月のぼるとき

（京、奈良の旅に歌へる）

なほ思ふ丹塗はげたる大寺の柱のもとに念佛する間も

つれだちて湖ぞひ行きぬ覗うる大津乙女と比叡の法師と

和泉路や花見がへりの人のせて俥ぞはしる宵月夜かな

春の宵水にのぞめる勾欄に鐘をかぞへて君とならびぬ

磯松の幹の間に白堊見ゆいさり舟見ゆ須磨の浦かな

春雨や南大門のこま犬も白き息吐くさくらが中に

書牘一則

素陽生

放課後、櫻の宮にボートの遠漕を試み、疲れし身躰を引きずりつゝ歸宅致し候へば、珍らしや机上に、絶ゑて久しき我が「銀鈴」の投げられしを見受け候。さながら舊き戀人にも遭ひたらんやうの心地にて、一字一句非常の興趣と歡喜とを以

て讀み申候。詩友各位が常に怠り給はぬ奮勵、いづれも錦もて飾られつらむやうの心地致し、羨望と敬慕との念に打たれ候。小生事、當大阪高商入學以來兎角學科に追はれ勝にて、悠々詩作を試むる餘裕なく、殆んど、三度の食より熟愛せし讀書も、捨てて顧みる暇なき有樣にて、次第に俗化しつゝあるは、自分ながら愛想が盡き申候。從ふて近來如何なる方面、如何なる針路に向つて新詩の發展しつゝありやも皆目解り申さず、陳腐なりとして捨てられんとせる詩と雖も、小生の趣味の上よりして、痛く興味を感ずるものも有之候。左に

少々小生が駄評を試み度、勿論忙中閑を偸んでの所業に候へば、或は正鵠を失し作者の眞意を誤解せる邊も尠からざるべく候へば、惡しからず御諒察の榮を得度候。

卷頭桃村君の『若葉』は清新の氣紙上に横溢せるを認め候、而かも氏の作が敍景詩より變じて敍情詩に遷らんとせる著しき傾向を觀取致候。然れ共小生は寧ろ濃艶なる『春の雨蛇の目してゆく京の子が傘に上にみる朱き塔かな』を白眉なりと推賞するに吝ならず候。要するに氏の作は目下過渡時代にしてこゝ一両年を經候はゞ、燦然目を奪ふの作物も拜見せらるべしと樂み居

り候。

有井漱花君とは嘗て濱中にて知遇を辱ふせし君に候べし、君はいつかゝる技倆を養ひ給ひしや一首毎に何物かに觸れんと焦心し給ひし痕歴々として見るべく候。小生は君が短詩に對して侮るべからざる才能を有し給ふを心中より喜び候、作中『丈あまる』『あわかの夜』の二首をめで候。

社中紅雨君の作物ばかり小生の心を躍らしむるはなく候。君が境遇と詩と對照致し候へば、まことに云ひ知れぬ或物に引き寄せらるゝやうに覺ゆ候。特に『二十五年泣けと給ひし涙かやと

ばかり思ふ君はあらぬか」作そのものゝ價値は問はずもあれ、眞に逼れる君が實感の上に小生は多大の趣味をこの一首に寄せ候。其他「古き葉と新らしき葉と」「敗殘の」等皆とり〳〵に面白く候。

神來君の「餘の涙」の中「灯」は小生に忘れ難き感興を留めしめ候。

其他の諸君の作物一々申し上げんも煩はしく候へ共、一首々々多大の興味を以て讀了致候。無遠慮且大膽なる小生の評言幸に御免被下度候。色々出駄羅目申上ぐべきの處、蚊に追はれては仕事にならず、おまけに睡魔頻りに來り候まゝ擱筆致候。敬具。（五日電車の音を耳にしつゝ）

夏木立

○　菅原紅雨

大海に沈む夕日を指さして泣きし若さにかへらむすべも

わが戀ふる半いたらぬ君なれどなほ忘れ得ぬはかなき心

何となき不安おぼえぬこの夕うすくれなゐの薔薇の散れば

見る日には君を疎とんじ見ざる日は切に戀し

ぬをかしき心
この日頃戀せし人に全く似ぬをろかしき人さ
な口吸ひそ
十惡の報いかあらず夜晝なく胸におぼゆる强
きさいなみ
七年は幾億年の心地すと泣きしは誰ぞ人妻の
君
死と生と交々欲りすいたましき世界をわれは
君に見いでぬ

○　吉田櫻川

春の夜や街さざめいて行く人はみな君に似ぬ
うす霞して

菜種さく馬路の野寺に法を説く日かやかすか
に鐘の音きこゆ
うす靄は菜の花かをる馬路の野に紫こめぬ夜
明けぬるかな
穂麥ふく春の風よき馬路の野は薄かすみしぬ
朝の鐘鳴る
月おぼろ舊都の君を戀ひまつる上臈人の面影
も見ゆ
人戀し五月眞晝の濃青雲行くへまもれば人の
戀しき

○　藤本晩花

わが胸の炎の中に眼とづれば叫ぶ聲きく夜晝

となく
徂く春の杜鵑花の雨は昨泣きしおもかげ人の
涙にも似て
人寢ねて靜寂にかへる夜の街を君がり行くと
われは急ぎぬ
み手とりしその日ゆ知らぬ病得て君戀ふとだ
に言ひ得ざる我

○　森脇桃村

火ぞ消ゆる油もて來よかくさけび日に夜に君
がうなじまきねぬ
雨の宵黃なる障子に四五人の影して語る父母
の家

▲朝虹（四ノ五、六）○明笛（一ノ二）○青年文學○薄の花（五ノ一、二）○小皷（一ノ一）○浮城（五ノ七）○花無果（三、四）

▲本社同人菅原紅雨は轉勤のたの本村を去れり。されど共本社との關係は從來の通りにして、依然社員として筆を執るべし

▲次號八月號は本誌滿四周年の祝意を表するため紙數を增加し躰裁を一新すべし。種類の何たるを問はゞ投稿せられたし。

▲本誌一ヶ年分五拾錢前納者を以て社友とし、全壹圓前納者を以て特別社友とす。次號に通常社友及特別社友の芳名を報告すべし

銀鈴　三冊郵税共拾參錢　六冊仝前金貳拾五錢
廣告料　一行拾錢　半頁前金六拾錢　一頁壹圓

明治四十一年七月九日印刷
仝　年七月十日發行　銀鈴第三十三號

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三二
編輯兼發行人　河野岩雄

仝　縣飯石郡赤名村大字赤名八二一
印刷人　水村柳三郎
印刷所（右同所）赤名活版所

發行所　島根縣邑智郡田所村　銀鈴社

銀鈴

第三拾四號

目次

開卷の辭……社同人
わが玉座（短歌）……大屋桂水
新緑（小品）……吉田櫻川
赤き球（短歌）……月森神來
春日遙遙（漢詩）……文學士佐藤芝峰
銀鈴社咏草（短歌）……松本野火等
「惠の露」に就て（雜文）……飯塚雲水
句……南風等
懷舊五年（雜文）……河野翠瀲

開卷の辭

創刊滿四周年第三十四冊を發行するに方り謹んで我が誌友および讀者諸君の恩賞を感謝す

銀鈴社同人

わが玉座

大屋左一

けがされしわが玉座かな昨日まで血になまぐさき呻吟をきゝぬ

二十五と人も言ひしやさすらひの寂の心野に君を見出でぬ

朝びらき彩帆に薔薇の香は充ちぬ聖國の糧を君にまいると

現、さは王女が朝の花裝被衣まいらす子と召されれる

撫の根に夏をしさけて眞清水の魂の常井に今日も足らひぬ

夕虹に掌うちて躍る子とよみがへりにき二十五の夏

乳流れの美し御國の夏にして白き虹見る日を思ふかな

新緑

櫻川

教育者の孵卵兒二百を養成してゐるわが校玄關さきに木柵で劃られた築山の一株の小松こそ、昨年五月二十三日皇太子殿下御臨幸の折り、紀念のため御手植遊ばされた、いとも愛でたい瑞松です。その右には當時警衛として隨從の東

鄉海軍大將閣下栽植の羅漢松がありました。其他戰勝紀念の月桂樹各期卒業生の梅、櫻、青桐等、くさ〳〵の紀念栽樹の新綠が滴るやう——木柵堤の抱橘さへ新芽をふいてやさしい香を放つてゐるのです。

小倉の洋服にいかめしく肩聳やかして、花やかな空想に笑む寄宿舍生活の我等が、悲しい時寂しい折り獨り瞑想に耽つたのもこの新綠の樹蔭或は佐保姫の霞織る筬の音と鶯の初音を聞いて故鄉の戀人を思ひ出したり葉洩れの空を動く雲の去來を見て亡き友をなつかしんだのも。

君、僕の身は新綠です。義理や人情の皮につゝまれて花既に散つた薄命兒ですもの。

友懷かしき想に胸が燃ゆる折り僕はこゝに泣くのでした。

あゝこの新綠は如何に我が菫雨を泣かしめたでしよう。その翠色滴らんとする樹蔭を歩いて見ると夢の面影、その幻、生温かい追憶ば昨日のやうに湧きあがるので——あゝそれは去年の彌生の黄昏でありました。

わが菫雨の言葉はくるしみなやむ靈の深い呼吸を言ひあらはしたやう、現世の苦痛と未來の恐怖とは二人の胸を稻妻のやうに閃めき通つ

て罪ない額を俯伏せながら、よく二人で抱合ふて泣いたものです

回顧すればそれも夢、菫雨は業を卒へて、今は公の務めに從ふてゐるのです。金緑の詩集を胸に我世榮華をうたつた昔の姿は、いまどんなでせう。

炊事勤務室の横側の紫や白の藤涙よする昨日今日たれもやむ春愁のいたみに堪へで、吾は新緑の樹蔭をさまようた時、嫩葉の隙をもれて君がみ聲をほのかに心に聞いたのです！——その時オレンヂ色にいるどられた清光院の空は、次第に薄墨色に黄昏れて、乳色のカーテンを洩

るゝオルガンの音ゆつたりと、夕の大氣に波うたせながら、新緑の梢を漂ふのでありました。主の榮光を讃美するかの調も、夕々に耳なれて、新緑の樹蔭に立つて今更胸を衝く想はたゝ。

寄宿舍に居るも最う一年。

新緑は來年も再來年もおなじ碧翠をかざるでせう。

赤き珠

月森神來

紫に菖蒲さく日はおなじ名の顔よき人の追懷に泣く

汝が乖き珠をくだくと手力に山をも裂く子驚
然に來し
み手枕きて涙の皺に興じたる低き屋も見ゆ磯
邊を來れば
惜しからず召したまひなば銀も黄金もさては
生命の珠も
常にわが眼路にこそ立て蓬髪の二十の少女お
もやつれして
瑠璃の空一ひら雲す君おもふ和みごゝろにう
たがひの影
柴染の粗き衣に白玉の肌をつゝめる少女こひ
しき

わが心喜をねず梅雨空のものうさに似て絶ねず涙す
二齲汝を讃す玉樓にわがよき君とあるすがたかな
さつき雨さつきつゝじの紅と空木の花の白きとにふる

春日逍遥

佐藤芝峯

萋々芳草路　病骨自温存　花影紅三里
春潮碧一痕　麥隴深宿雉　暮靄遠藏村
更向西溪去　沙明別有坤

望海

手擊赤白御天風　極目大江涵碧空　漫罵
屈原傷世濁　却憐楊子哭途窮　龍歸洞窟
晩雲濕　鼇賦島身秋水雄　長嘯振衣千仞
阜　殷々聲落渺茫中

荆軻（古体）

白虹慘貫日　悲歌別燕丹　咸陽氷一尺
祖龍膽已寒

夫婦松（古体）

――闕の五本松一本切りや四本
跡は伐られぬ夫婦松――

千古自鬱蒼　雙々倚丘阜　勿剪兮勿伐
靈松失其偶

銀鈴社詠草

○　松本野火

あなやいま日ぞくれなゐす朝靄の乳のいろしてこめたるなかに（七月十七日の朝もや深くこめたり即ち初めの四首なる）

靄の海明けのこる灯を川ぞひの家にほの見る鶏のなくとき

朝々や靄吸ひ山の松かせにそだてられたるみめよき乙女

吾のみくろし大あめつちはたゞしろき中に朝居てうぐひすをきく

紅させるくちびるなれば萬人のこゝろ溶かすまどはしいふや

朝の月あふぎてなきぬ山の鳥露もつむねの枝にならびて

白玉のつめたさしらずそのいろをその光をばめでたまひしか

琴ひきて潮ぢき來しと青いろの袖ふり來たるうしはの乙女

蛾にとはむ紅き灯と夕顔のみづ〳〵しさのいづれをとるや

永田玉椿

○

をさな子よ汝が白蓮の心にも赤き火の芽の一点を見む

眞夏の日赤き煉瓦の立ちならぶ街に鄙の高ごゑを聽く

小川石櫻

○

ふる里の我にひとつの御墓よりまぼろし見もれ夕月のかげ

天地を二つに裂かむ心もて別れ給ふや我を置き往く（桃村兄に）

森脇桃村

○

あゝ二十日潛然として天地もなみだにくれぬいたましきかな

み言葉は二なく華やぎいませぬもかほみ心に

雲は去來す
手に觸れすされど目近に葩おきもののたまは
ぬをかしき人よ
蚊遣たき青葉の中の四阿に君をまつ夜の夕顔
の花

○　菅原紅雨

何なればさばかりならぬ片時をいと大いなる
罪とのたまふ

○　河野翠激

あはれまた來世おもはぬわかうどの群に向ひ
ぬ母よゆるさせ

拙著『惠の露に就きて』　雲水

予は、舊臘劇務の餘暇、書肆の乞ふがまゝに、東宮殿下の山陰行啓記念唱歌として、「惠みの露」一篇を公にし、汎く先輩知己の批評を需む。作固より一小篇にすぎず。人は其の寧ろ徒勞に屬するを笑はむも予は一に愛らしき敎へ子を思ひ且は聊か地方敎育界のために盡さんとての微衷に外ならざる也。

江湖同志の士よ、紛々たる駄評は、予の介意せざる所なりと雖著者の意を諒し眞摯懇切以て批正と訓戒とを惜しまざらむことを祈るこれ予

が希望也。

句

行水や普請の石を積む所　南風
夏帽の十ばかり行く木立哉　同
川狩の橋下に立てる童子哉　汀雨
前庭は川に出る道ラムネかな　同
五月雨や名もなき花の白き咲く　鐘愁
岩清水苔を左右に流れけり　同
たま〳〵に鳥の來て居る清水哉　同

懷舊五年

翠激生

年月の經つは早いものだ、本誌『銀鈴』の發行を創めたのは、三十七年の九月、已に五年の昔となつた。

初號は新凉會といふ歌會の名義で、唯會友へ頒布するのみを目的に、『銀鈴』と命名して少許數を印刷に附した。當時新凉會に籍を置いた會友の數は僅かに三十名内外であつたが、第二號から、新凉會と全く別個の團体を作つて、發行所も銀鈴社と改稱し、十一月に其第二號を出した。

この頃の『銀鈴』は初號が四頁で五十部、二號は八

頁で百部位刷つたものだ。三號から表紙繪も入れて內容も躰裁も紙數も、大分賑かになつた。

直接「銀鈴」の創設に與つたのは、余一人であつたが、三號より編輯の側に大屋桂水と佐々木朝風とを加へた。越ねて十一月千代延春圃も入社した。

第九號の發行、三十九年一月に至つて、「銀鈴」は初めて菊版といふ躰裁に改まつた。本號以後の賣高は、田舍雜誌としては稍々出色の方で、毎號賣切の盛況を呈したものだ

第十號の紙上で、松江草笛會と合同の旨を發表して第三種郵便物の權を讓り受け、少し手廣く

發賣することにした。この月佐々木朝風の退社と共に、代つて菅原紅雨が編輯室に勤めることになつた。

表紙繪は、專ら畵伯杉浦朝武氏の麗筆に成つて、二三號毎に改刻した。三種郵便物の認可權を得るまでは大概隔月の發行であつたものが、遽かに毎月定期に發行することになつたので、我等の多忙は層一層を加へて來た。この年六月大屋桂水は突然上阪して、本社の編輯員を辭した。

四十年四月、第二十一號で再び出雲白鳥會と合同し、同時に朝日山錦水が入社した。

第二十五號より又、一轉歩する。△（以下次號）

▲寄贈新刊　△浮城（五ノ八、九）△朝虹（四ノ七）△山鳩（五ノ一〇）△青葉文學（一ノ七、八）△無花果（五ノ一一）△藻の花（五ノ一二）

▲投稿規程　短歌長詩俳句美文評論小說何でも可い、併し短かいものでなくては困る。用紙は半紙全葉半面十二行二十字詰で結構だ。

▲社友清規　六冊分前金貳拾五錢を納付したものを社友とする。一ケ年分特別社費壹圓を納めたものは特別社友とする。一般讀者は成るべく社友となられたい。殊に知己を有せらるゝ諸君は社友の勸誘に努めて、本社のために高助を與へられんことを希望する。

▲次號締切　九月十日嚴に〆切る、期限に後れた分は容赦なく次回へ廻すから豫めご承知が願ひたい

▲特別社友名簿（其一）

口羽義晃君（以下次號）

▲社友名簿

三宅憲治君　土佐兼次郎君
増野三良君　井上翠紅君
月森神來君　吉田義臣君
服部紫葉君　小川石櫻君
飯塚雲水君　平田鐘愁君
松本野火君　山根實太郎君（以下次號）

銀鈴　三冊郵稅共拾參錢　六冊仝前金貳拾五錢
廣告料　一行拾錢　半頁前金六拾錢　一頁壹圓

明治四十一年八月廿四日印刷
仝　年八月廿五日發行　銀鈴第三十四號

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三二
編輯兼發行人　河野岩雄

仝　縣飯石郡赤名村大字赤名八二一
印刷人　水村柳三郎
印刷所（右同所）赤名活版所

發行所　島根縣邑智郡田所村　銀鈴社

銀鈴

第參拾五號

目次

哀詩二篇（長詩）……月森神來
日記（雜文）……甲村紫蝶
銀鈴社咏艸（短歌）……山本碧帆等
文壇の昨今（評論）……四天王
雜吟（俳句）……芳仙子等
懷舊五年（雜文）……河野翠瀲

哀詩二篇

月森神來

晴雨計

「晴かはた曇か知らず、
よき人の來たまふ今日は。」

かくて我まづこそ覗け——
蝕みし胸の古柱に
落ちんとしわづかに懸る
煤、黑のバロメーターを。

あなあはれ我眼は盲ひぬ。
『晴かはた曇か知らず』

ねたみ

友とゆく眞夏の大路。
友の眼に不安の曇影。

かゝる時ああかゝる折
小きざみに顔美き女。
大跨にみにくき男
連れ立ちて私語きながら
後手もつと追ひ越しぬ。

この刹那この瞬間に
我が友は何に激せし
ゆく人の後影みて
高聲に罵り笑ふ
（ふと思ふ友に戀なし）

友とゆく眞夏の大路
友の眼に悲愁の濕潤

日記

甲村紫蝶

しかとは記憶せぬ、たしか自分が二十二の冬であつたらう、某より妻をもてと勸められた。その頃の日記をふと古本箱の底から探し出した。

一月四日、朝來快晴、

晝頃より雪降る。山も野も唯それ白皚々。夕方某來る。妻を持てと云ふ、自分も先方の女を知らんでもなし且つは親戚の間柄。旁々好都合であらうとの事。一任した。晩遲くまで話して歸る。

一月五日、晴、雪、

二三の家を訪問して夜九時歸る。間もなく某來る、今日直ちに先方へ參りました。自分はその卒急なるに驚いた。談判は不調である。なにも人知

れず抱き合つて戀に泣いたといふ仲ではなし敢て骨も肉も碎けよとばかり慨きはしない。されど彼女の涼しい両の瞳、その仇ない無邪氣な豐頰、愛らしい口元までが目にちらつく。ねゝまゝよと冷酒を煽つて寢た。餘りいゝ氣持もせぬ。折から雨戸をしばたゝいて吹雪がする、寢られない。今更ながら身に泌みて寂しい。

日記は日と共に進んで、四年の星霜は夢かとばかり過ぎた。

この頃ふとしたことから二三度彼女に出逢つた。昔ながらの愛らしさは今もおも影に殘つて

ゐる舊い記憶が再び呼び起されんでもない。こんなことを思つたり書いたりするのは自分ながら罪を作るやうな氣がするけれど、戀を得ての滿足は一時に止る、失戀の傷みは永久消磨せられるものではない。併しその傷手は美しい傷手である。彼女に接する毎に、決していやな氣はしない、寧ろ心の底に、昔の懷しさ、戀しさ、嬉しさが油然として湧き來るのを覺ゑるのだ。

（完）

◎銀鈴四周年を祝して

紙燭して讀む何々ぞ蘭の秋　郭公樓

銀鈴社詠草

○　山本碧帆

春の月君わがために琴をとれ後の世ながく思ひ出とせむ

○　藤本晩花

わがうれひ火中してまし三日つづけ夢みし吾妹かたはらに在り

○　河野素陽

秋風は蕭條として大野行き悔ゆれどされど我が森に入る

ああ千たびわが胸をゑる數人の群にし君が一

語聽くとき
友戀し涙速の西のみづうみに涙ながせし日の
思ひ出に（友は大阪高商にりて文才あり）

森脇桃村

○

青き瓶赤き瓶並めから〳〵と鬼のやうにも笑
ひ給ひぬ
三五人裸したるが船の上に豆など喰みぬ八月
の海

吉田櫻川

○

焦熱の心の苦役葉月野は聲をひそめぬ旱魃の
國
花かざす濱の少女の數人は素足に琴を彈きつ

つぞ來し（琴の濱にて）
わが胸に幾とせ秘めし戀なれば蓮のごとく淨
らかに咲け
何ものぞ黑き翼をうちひろげ君が周圍を固め
むとする
詩の宮のおほみ戸近く守り給へ左近右近のさ
くら橘（素陽兄に）

有井漱花

○

ああ聖の光にそむきいづかたへ走るとすらむ
我ひそに泣く

菅原紅雨

○

その夕君に似る子と似ざる子と二人を抱き泣

きにけるかな
君といふ大なる惱み胸に棲み巣くはむとして
間なくはばたく
夜毎夜毎寒き涙に頰の匂ふ君を夢みぬ別れし
日より
東の曇りかあらず小ひさなる境にうつるわが
胸の雲

○　河野翠激

かにかくに物よく語りおはすかな少女が髪の
香も知らぬげに
病あり み薬たまへ時たたばはや〳〵死なむい
のち危ふし

文壇の昨今

四天王

◎自然主義の流行何ぞ爾く甚しき。忌むべき意味に於ての自然主義てふ套語は都鄙到る處に滿ち充ちんとす嚴正なる意義に於ける自然主義提唱者等が、漸く自己の脚地に復へらんとするは喜ぶべし。

◎劇創作界の稍々着實なる態度に入れるは慶こぶべきなり。俳優の技未だ之に伴はざるものあるは惜むべしとなすも、劇作家が各々健全なる方面に向へるを祝せずんばあらじ。

◎多年純文學殊に詩歌に向つて新境を開拓す。

ること に努めたる雜誌『明星』は十一月の滿百號紀念發行と共に姑らく廢刊すと云ふ、我等は過去十年の歷史を懷想して轉々感慨に勝へざるものあり。機を得て誌上を汚さんと欲す。

◎出版物は常に讀書界の趣味嗜好に投ぜんことを期す。今の多數の讀者が何を欲求せるかを知らんと欲せば、試に書肆の店頭に立て。婦人に關する雜誌書籍、自然主義派の作物、諧謔、諷刺の出版物、眞面目なる著書は恐らく塵を蒙りて片隅に積重ねられ、諸君の目に觸るゝことなけむ。

△次號投稿〆切十一月十日▽

雜吟

秋風や山門を出る行脚僧　芳仙子
道先に燈火赤し萩の家　同
夜祭の花火見にゆく人出哉　同
紅葉狩り紅葉かざして歸りけり　同
松青く砂白し殘る暑さかな　鐘愁
手紙して殘暑の苦悶報じけり　同
澁柿の木末々々に殘りけり　同
喰ひ捨てし柿に蟻附く日南かな　同
澁柿の下草長し畑の隅　同
寺に寢て廊に起る夜寒かな　碧帆
讀經の鉦早めたる夜寒かな　同

奪ひ合ふ花火線香や兄弟　同

雨雲を壓して高き花火かな　同

どよめきは花火降り來る眞下哉　同

朝霧の晴れし妙義や雲起る　郭公樓

風荒れて鳥も渡らぬこぼれ島　同

本尊の疎影尊し曼珠沙華　同

羽月の母死す

初秋や我れ一週の喪に服す　同

扇の畫讃

蕎麥の花貢の駒の育つ村　同

旨公樓庵にて

鷄頭や砂浴びて砂ふるふ鷄　同

稻妻や酴醾酒を酌む程の闇　同

懷舊五年

翠激生

明治四十年の九月、即ち昨年の秋より袖珍正方形の躰裁に改めて、零碎質素なものとした。同時に社内の整理を行ふて、眞に我等の事業を輔け、文藝の興樂を俱にしやうとする、少數の人々のみを以て組織結成することにした。

本號以下籍を銀鈴社に置いた者は、いづれも熱誠摯實の同志のみであつた。

第三十號以後は、編輯部と事業部とを分別し編輯は主として紅雨、事業は一に余翠激の手に捌いて居たが、三十二號限り再たび其全部を翠激

の獨力に復した。

第三十三號より又々體裁を一變して現在の如き四六版に改め、ページの打ち方を諸君の合綴に便利ならしめた。相應の紙數に達した時は、總目錄を印刷に付して配附する積りだから、諸君の手に美麗なる一冊子となり得るであらう。

五年の歳月は、雜誌の壽命より云へば決して短くない。その間幾多の苦境を經つゝも無難に今日まで漕ぎ附け得た努力の跡を返り見ると、豈に多少の感慨なからんやだ。過去奮鬪の歴史を想ひ出す毎に、其處に直に我等は我等の愉悦と誇りとの影が浮ぶのを認める。

（完）

▲寄贈新刊　△青葉文學（一ノ九）韻文に駄作多きは惜むべし△明倫△朝虹（四ノ九）齋東野人語見るべし△學友△山鳩（五十一）再び發賣禁止にあひ尚ほ健鬪を續けんとす意氣や壯なり旭光の「時文」記者の豆鐵砲口に稅の入らぬが幸ひ也△藻の花（五ノ五）ベタ〳〵俳句ばかり並べてあるが目ざはりなり△かんことり（一ノ七）云ふだけ野暮△若葉（一ノ四）山岸荷葉の盈の月さすがは輕妙△無花果

▲御斷り　翠瀲旅行のため前月休刊

▲社友名簿（其二）

亀山曉花君　森脇桃村君
山本碧帆君　實延才三郎君
永田玉椿君　桑野彌市君

（次號下）

銀鈴　三冊郵稅共拾參錢　六冊仝前金貳拾五錢
廣告料　一行拾錢　半頁前金六拾錢　一頁壹圓

明治四十一年十月廿四日印刷
仝　年十月廿五日發行

銀鈴第三十五號

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三二
編輯兼發行人　河野岩雄
仝　縣飯石郡赤名村大字赤名八二一
印刷人　木村柳三郎
印刷所（右同所）赤名活版所
發行所　島根縣邑智郡田所村　銀鈴社

初刊明治卅七年九月二十日

終刊明治四十二年二月十日

銀鈴

終刊號

目次

短篇二首（長詩）……工學士　平野萬里
至誠の力（雜文）……飯塚雲水
玉（短歌）……川上賢三
落日前（長詩）……能海紫星
哀歌（同）……同　人
書簡……大屋左一
なつかしき銀鈴よ（雜文）……紫影生
加賀新八勝（俳句）……綸公樓
瓜の實（短歌）……月森神來
書簡……藏田のぶ子
銀鈴を送る（雜文）……能海精一
鳥（長詩）……山本碧帆
若水を浴びつゝ（美文）……多田東岳
船（短歌）……河野素陽
本誌の廢刊に臨んで（雜文）……菅原紅雨
書簡……川上賢三
鰐淵寺（長詩）……奥原碧雲
銀鈴終刊號に（雜文）……月森神來
花紅葉（短歌）……吉田櫻川等
下宿屋の半日（寫生）……疎髯子
古意四首（漢詩）……文學士　佐藤芝峰
私言（雜文）……前田木風
涙（短歌）……菅原紅雨
銀鈴と河野君（雜文）……入澤涼月
六首（短歌）……河野翠瀲
卷末語……翠瀲生

諸卿に感謝す

『銀鈴』は本號を以つて終刊となす。多年本誌に同情を寄せられたる先輩●社友●讀者幷びに本號誌上過分の賞讃と激勵とを賜へる幾多の知友諸卿に感謝す。

余の今後に於ける文學及美術に對する感興と愛着とは依然毫厘の增損する所なかるべし。

謹んで諸卿の寧福を禱る。謹言。

河野翠瀛

短篇二首

平野萬里

○

ねむたげの燈火の列、
空車曳ける男
走りつつ「旦那」と叫びぬ。
その聲に彼の全き
存在ぞあらはれたる。

○

椽の日向に寢ころびて

目の前をよぎりしゆゑに
小さなる蟲を殺しぬ、
はかなげに蟲は死にぬ、
うごきしもの動かずなりぬ。

至誠の力

飯塚雲水

神は實在なりやとの問題は、しば〳〵人の腦裡を往來し、而も折々繰返さるゝ詞なりとす。この宇宙間、果して物質的に神てふものゝ實體ありや。吾人は之に對して聊か疑なき能はず。吾人

は未だ神を物體として見たる經驗を有せず、また神に見(まみ)えたる經驗もあらざる也、然れ共吾人は信ず、神は必らず客觀的に實現すべきものにあらざることを。更に信ず、神の存在と否とを論ずるは、毫も宗教的眞理を左右するの力なきことを。實に神は「見る」を得べきものにあらずして「感ず」べきもの也。神は客觀的のものにあらずして、飽くまで主觀的に吾人の精神を支配するもの也。故に吾人が所謂神を感ずてふ語は、實に意識的事實によりて明かに表白するを得る也。

神人に觸るゝが、人神に觸るゝか、われ未だ之を知らず。しかれども神と人とは意識的に相接

するものにして、人は神の偉大なる力に浴し、茲に精神的生活を營むことを得べけむ也。而して吾人は眞に神を感じたり、靈的に神に接したり、されど其の神はキリストの感じたるそれに一致するものとは限らず。釋迦の信じたるそれと符合するものとも限らざる也。即ち吾人の接したる神は、至誠(グレートツルース)の力なり。眞實を楯とせる神也。われ此の力を感受して、稍自己の修養を資(たす)けしもの、尠少にあらざるを覺ゆる也。

あゝ人は至誠の力を得て新しき人となるを得べく、文學も美術も亦よく此の神の姿を感じて、始めて靈妙の境に達するを得む乎。本誌『銀鈴』

こゝに三十有六號を以て終刊すと雖も、こは決して精神的に滅亡を告げたるにはあらず、主幹翠瀛詞兄が、この荒涼たる山陰の野に、一點の紅花を點じたる過去の歴史を繰り繙けば、自ら此の至誠てふ神の力に感じたるものあるを思はずんばあらざる也。

玉

川上　實　三

むかしなり石ふる夜なも崑崙の山に明かしぬ
楊家の人と

春の日の珊瑚の海に玉拾ふおもひをなして相見る夕

赤がへるあまた入れたる古桶はまろびまろびぬ野分の朝

このひまに百、千の人の浮き沈みあるも忘れて君が戀聽く

いとやすく人を抱きていとやすく解く手に赤き煉瓦つむかな

落日前

能海紫星

赤色のLITOMASあなや、
酸性の味ひか嘗む。
見よ落日前の火の香り、はた熱の色、
須臾にして、大青空の寂靜に暮るる一時——

我れかく思ふ、曙の
東雲を曳く空の青、ALKALI性の反應に、茜する時、
不思議なる此黄昏の實驗に、いな天地に
何者か、方程式を形造る夕ありやと、かく思ふ、

今かきく、其夕暮の
大青空にかすかなる、風の吐息を、
はたおのが心の空に生の夢、消ねて行く時
かかる日の、いないな苦き味を味ふ可しや。

なげきの中に日はまたく
暮れて寂しき青空に、今宵の月の
影もはた、緑青の銹色を帶ぶ、哀れ此
景色の上に世はなべて、青き夢をや
結ぶてふ。さと夜鴉のしは嗄れし啼聲きこゆ。

……かくて我が、想も一歩
夕暮の寂靜を經て、青色の夢をつとふむ。

哀歌

卷を開きて我れは泣く、NOTRE-DAMEの物語り、
ESMERALDAが薄命に、見よ文字の色、ほの暗き、
闇のかはりをさと放ち、何處か知らぬ黄昏の、
いないな遠きPARISより、NOTRE-DAMEの鐘樓より、
寂滅の譜を辿り行く、鐘の哀歌をいまぞきく。

○　大屋左一

「銀鈴」廢刊の御報に接し無量の感にうたれ申候。懷舊談をとの仰も有之候處かれこれ事繁きにとりまぎれ其意を得ぜ失禮仕候。

青年は未來の望につきて語り將に死せんとする老人は頻りに昔を語り候てと、ありふれたる現象に候へ共貴誌の死は徒らに舊きをのみ云々するに止まらで更に〳〵まされる榮光に入るべき美はしき十字架のそれならん事を切望致候。「見よ不窮の生命は見ゆる所の如何によりてかはるべきものにはあらず」再び甦りてまされる形をもてあらはれ出づべきものに候。

なつかしき銀鈴よ

紫影生

あゝなつかしき銀鈴よ。汝は日ごろ予が第一の慰藉者なりき。予が第一の機關誌なりき。予が不平をもらす唯一の伴は汝なりき。予が悶々の情を語る唯一の友は汝なりき。時には自惚話(のろけばなし)に汝が數頁を埋めたることありき。懺悔ばなしに汝が紙數を殊更多からしめたることありき。あゝ汝銀鈴よ、なつかしき銀鈴よ、可憐なる銀鈴よ、汝は今將に死に就かんとすと聞き、予はいたくてれを悲めり。汝は由來沈默なりき。某々誌のごと

くお喋舌家ならざりき。そのつゝましやかにして人に驕らず、世に阿らず、自ら高く潔くして君子の風あるまことに愛すべかりき。然るに今や汝は永き眠りに就かんとす、汝を知れるもの誰か一滴の涙無からん。

想へば汝の生涯は實に華やかなりき。汝の經路は寔に單純ならざりき。幾多の辛酸を重ね、幾多の苦楚を經、狂瀾逆卷く大海原にいく度か沈淪の不幸を見むとせり、幾多の迫害と百千の障礙とは交々來つて汝を厄窮に陷らしめたり。然るに汝はよくこれらの苦艱に堪へ地方文壇の明星を以て自ら任じ、極めて眞面目に、極めて堅實

に、遂に今日あるを致せり、其功やまことに頌すべく、その勞やまことに多とすべし。

汝、今、逝かんとす、坐ろ往時の偲ばるゝかな。さらばよ銀鈴!!

加賀新八勝

郭公樓

琴嶺錦楓

紅粉をふき散らしてやむら紅葉

砂汀朝寒

朝寒や調子のたるき糸車

仙堂仁王

初嵐仁王の空鼻吹き通す

臥石萩花

巖斷ゑ所萩白と黄と赤と

夫島 妻島 初汐

初汐や勝地に數ふる島と島

海上秋月

名月に呼び合ふ船と二階かな

潜戸伏岩

伏す石の腹に千古の秋刻む

暮海一島

波負ふて波抱く岩の紅葉哉

瓜の實

月森神來

まづ我れは汝等が族に眼あるものなしと熱罵しやや心なぐ

鶯の歌と牡獅子の雄叫と何れを君は讃へ給ふや（人に）

吹く風の吹くがまにまに安らかに靡く尾花に似たる君かな

ああその日君がみ手とり春の野の鳥のごとく
に歌ひけるかな

そのかみのわが戀人と語る子の側をゆけど心
躍らず

われ捨てぬ曠野の中にけしの實を一粒おきし
如き戀ゆゑ

爭はじされど證は確かなりかくて斷たれし赤
紐を投ぐ

色硝子花とかをれる夜の街のとある館の前を
去り得ず

十の鐘十の音色すそのごとく百の女は百の香
りす

瓜の實を瓌の實とせず瓜蔓に生らしむ神をわ
れは恨まず

○

藏田のぶ子

この冬以來はじめての降雪當地は今朝から殆

んど小止みもなく積り居り候。ご經營の「銀鈴」ご都合によりご廢刊の由口惜しく存候、就ては書けよとの御すゝめ昔のよしみ忘れ給はでうれしきおん仰せにも候かな、枯れ果てし頭で筆執れやう筈もござなく、せめて舊作の感想やうのものでもと撰びかけは候ものの折柄當方にも報告出版の企いたし居り、ひまを偸みてはつゝり居り候央ば、彼是延引いたし候て今二三日の〆切には迚も間に合ひ申すまじく、お邪魔いたし度きは山々ながら何率お免し下され度、何率悪しからず思召下され度候（一月十三日）

銀鈴を送る

能海精一

謹啓、新年の御慶仰せの如く、何處にも目出度かりける事と存し候。然る處先般は、「銀鈴」廢刊の御おもむき、承り一驚を喫し申し候、吾人は彼の『明星』が終刊を告げて我が詩壇の益々亂脈に走り行くをながめつゝ、又もや縣下文壇の沈滯、其極に達したるの時、貴誌廢刊の悲報に接したるは遺憾至極に存じ候、貴誌今や號を重ぬる、四十に及び、又以て甚だ長しとは云ふ可らざるも、彼の地方文學雜誌が、朝に出でゝ夕に倒るゝの中

に於いて優に其いく多の障害を排し、貴誌が今日に及びたるは、誠に感服の外之れなく、兄が苦心慘憺たる努力の程も、略推察仕り、溯つて我が縣下詩壇の往時を回想すれば夢の如く煙の如くに果敢なきもの之れ有り候。

想ふに我が日本刻下の詩壇ほど其亂脈を見るは、明治文壇史上に、記して著るしき傾向を示す可き者かと存候、彼處にサンボリスト有り、茲にナチュラリスト有り、口語詩あり、古典派あり、ローマンチシズムを叫ぶもの、オブロモイズムを呼ぶ者、半獸主義を怒號する虛僞者、雜然として其論爭と創作に急はしきの時、我が島根詩壇の

沈滯果して如何の聲や在る？修養を守ると云ふ勿れ、汝等が修養は犬馬の勞に過ぎざるなり、土臺なき頭腦に深蘊なる學理を盛るは、愚之れより甚しきはなく、吾人は切に其意氣地なきを怪みて、惜かざる者に候。

此時に當りて貴誌の廢刊は何等か重大の理由なきを得ず、本より小生は貴誌に就いて、餘り多く知らず、否むしろ全然知らずと云ふの可なるに如かざれども、常に貴誌の行動に就いては堪へず我が島根文壇のために囑望いたしたる次第に候、乞ふ河野兄足下、更に捲土重來の期を得るの意なきや？

貴誌の廢刊は、本よりいく多事情の本に、兄の決心せられたるもの、敢へて吾人は足下の行動に對して批を打つべき者にては候はざるのみならず、批を打つべきの謂れなし。併しながら唯々足下に望む一言を呈して、余が貴誌に對する廢刊の辭に加へ置き申し候。

彼の新興藝術壇の爲めに、一時光彩陸離たりしフランスは、十九世紀の末葉より漸次、其光茫を消磨し、てデカダン即ち衰退傾向を示し、廿世紀の劈頭、先づブリユドム及びフランソワ、コッペーを始めゴンクール、アカデミイの名士を送りて今日の沈滯其極に達せり、翻つて我が島根

文壇を玆に彼の佛國文壇に比して(本より事の大小、實質の差異を論ずるものにては候はず唯其傾向をのみ論じたる迄に候)机下に呈して其極を結ぶべく、少しく御精讀の榮を願上げ候。

大陸文學の沈滯は、足下本より、御承知の事とは存じ候へ共、殊に佛國文壇の沈滯に至りては、往年の盛時に比して、うたゝ其變遷に一掬の暗涙なき能はず候、幾多老大家の凋落は遠く、佛國文界衰退の源をなしたるは、云ふ迄もなき事實として、火を見るよりも明にて候。

嗚呼老大家の凋落？果して我が島根文壇にもまことかゝる現象を呈せざりしや否や。

彼不幸にして未だ、島根文壇の高潮を見ざるに、早くもこゝにも佛國文界の衰退期のみに遭遇したる我が文壇の惡傾向をみとめつゝ之れあるものに候、余は茲に地方的老大家の一奇怪なるニユー、テクニックの本に、我が島根文壇の衰退を悲み申し候、彼のフランス現時の衰退には、最も華やかなる高潮期を探ぐるにがたからざるも、我が島根文壇は、其高潮期を見ずして、遂に暗々裡の中に葬らる可きか、昔はワイマル詩聖が、プロメトイスの口をかりて、其やるせなき失戀を詩つて、云へる者之れ有り、曰く、

『美くしき大野の原に　花の彩はゝ笑ま

ずして　日はほのに黄昏れそめぬ』

嗚呼美くしき清華の誇りなくして、遂に島根文壇は永く失戀の域を脱し能はざる者に候可きか？彼のフランス文界は、美くしき青春の壯時に、思ふまゝなる美味を喰ひ盡したる曉が、今日の衰退に候、然しながら我が島根文壇は如何の壯時をか夢みたりし、乞ふ河野兄足下余は此解釋にかふるに、ワイマルの詩聖が一句を再び兄が机下に呈して、拙墨の終りといたす可く候。

不宣。

『美くしき大野の原に　花の彩はゝ笑ま

ずして　日はほのに黄昏れそめぬ』

鳥

山本碧帆

かの鳥は、
惡魔のすめる森に來て
終日なきぬ、いとさやに
あはれ妙手の琴か、否。——
あらゆるものを醉はしむる。

（一月十四日）

若水を浴びつつ

多田東岳

元日の朝まだき、われは若水浴びむとて、井戸近く歩みよりぬ。飛雪纜紛として、巴と狂ふ時なりき。萬象昨日のものながら、何んとなうその見ゐ新に陽春の氣、いたくわが胸に通ひき。われは衣を脱ぎて、徐ろに灌ぎはじめぬ。水氣は朦々として、身邊を罩め、心氣は爽然として、いたく胖かに、かの白雲に乘じて、帝鄉に登らむが如く、獨尊の思、げに深かりき。さなく雪はふりやみぬ。かくてわれは思ひつづけぬ。いかなれば、雪はそのふ

りを早く止めざりしか。天のわが心骨を勞するは、さちうへなけれど、そにしても魯鈍の身、われはそのたまたまなるを覺ゆるなり。あはれこの身、かく朝な朝な水浴びばとて、かくて何んの詮かある。かくて何んの力かある。ただ自然の生をみ、自然の死を知らむとするのみ。嘗ては一日の蝴蝶を希ひき。されど百年の封豕を希ふに至りぬ。功程日月、げにわれは、日月もて人間を度らむとするなり。あはれものう、所詮は愚鈍の思ひなれど、されど、われは本然の一念の、胸臆深く存するを認むるなり。あだに生れこざりしを、胸底深くひそむるなり。げにや初日は輝々として、今其

の全線をわれに浴びせぬ。金烏は熙々として、今高く鳴いてわが頭上を翔りぬ。瑞雲は靉靆として、色美はしう今われに對しぬ。あゝ彩や幸や。さらばとはにその光をかへざれかし。

希望の力は、渾身に充ち充ちぬ。いでやこの力によりて、新らしき樂しき業にいそしまむ。新らしき樂しきこの年をことはがむ。げに、今日はわが自覺の第一日なり。げにわれに敎訓ある第一日なり。さらば今一そそぎ灌ぎて、双に似たる冷水の、その鈍きを笑はむか。

船

河野素陽

朝風はしろがね造り美くしき霜の木立をなびかせて吹く

たゞ二人住まば毒よし茨よし更らに悪魔の來るなほよし

眞帆あげて港を出づる船に似し戀かもややに君遠ざかる

たとふれば戀失ひし若人のよろぼふさまに冬は來りぬ

本誌の廢刊に臨んで

菅原紅雨

我が『銀鈴』は、爰に、第三十六號を廢刊するの已むなきに至りぬ。顧みるに本誌の創刊は實に明治三十七年九月なりき。爾來裘葛を更ふること既に四たび。其間に於ける、畏友河野翠激兄が幾多の艱苦と闘ひ、あらゆる辛酸を嘗め、鋭意そが發展に盡瘁したる多大の功績と勞苦とは、炳として永く地方文壇史上を飾るものと云ふ可し。由來雜誌の刊行は、百般の事業中最も至難の事に屬す。況んや山間僻地なるをや、況んや獨力に

して而も一面常に繁劇なる業務に鞅掌するものゝ經營にかゝるをや。焉んぞよく何人も之に堪ふると言はむや。兄の苦心實に想像するに餘りあり。

然れども、終始離れざる財政上の迫害と、兄が身の愈々益々多忙を加ふるとは、到底これを持續する能はず、憾みを呑んで廢刊する運命に陷れり。悲しからずとせんや。

さはれ兄が、この雜誌によりて與へたる文壇上の餘光の、幾多の後進の誘導激成したるものあるを想へば、亦以て大に心を慰むるなくんばあらず。兄の功績や大なりと云ふべし、『銀鈴』の餘

澤また洽ねしと言ふべし。

嗚呼、わが『銀鈴』はまさに死に瀕せり。この時に際し吾人漫に筆を執り所思の一端を敍ぶと云ふ。

川上賢三

○

いつもご無音に流れ申譯無之候。多年ご經營になりし銀鈴御休刊の由拜承、殘念に存候。東都にても『明星』の廢刊せざるを得ざるに至りたる時勢、何かと御苦心の御事と存候。されど新詩社系統の社會に重きを爲し來りたるは、年と著るしく候間御自重の上更に多大の抱負を發表せら

るゝ機もあるべきことゝ前途を樂しく期待仕候、幸に御自重願度候。次に平田、平野、吉井、石川の諸子及び小生等にて經營致し候明星の後身とも申すべき『昴』につきては、明星同樣御援助願ひ度候。編輯は平野、吉井、石川交互に當り居り候。小生近來詩作は全たく致さず唯新詩社と昴につきては從來の關係上多少力を盡し候も作物は皆無に候、是れ小生の思想の變化と生活の狀態に依るものに候、されど折角の御來旨につき、延引ながら別紙御覽に入れ候、御一笑下され度、先は右御返事旁々、艸々。

鰐淵寺

奥原碧雲

山ふかく木立はくらし
日の光り稀にかがやき
鳥のうたましらの聲
朝夕の窓に聞ゐて
ああ幽寂なり鰐淵寺

苔青く流れは清し
岩はしる瀧のとどろき
鐘の音讀經の聲

柵人の耳を洗ひて
ああ幽寂なり鰐淵寺

寺は古し推古の昔
法の火は永久に絶えせず
さゐ渡る眞如の月
煩惱の塵を拂ひて
ああ幽寂なり鰐淵寺

銀鈴終刊號に

月森神來

余が『銀鈴』に關係したのは、一昨年の四月以來である。尤もその以前から主幹河野君の名も知り『銀鈴』の名も耳にして居たけれど、何分にも余は三十九年の末頃から歌を作り始めた位だのに、河野君はと云へば既に斯道に名を知られた人で君と余との懸隔が餘りに大きにあつた爲めに何時も交際を願ふ事に躊躇したが却つて君から文を頂いたので大に恐縮した。併しこれが君と余と余と『銀鈴』との連鎖となつたのである。

それ以來余は始終拙劣極まる詩歌を投じて『銀鈴』誌の厄介になつて居た。實に『銀鈴』はわが親友であつた。『銀鈴』の發展は余の常に祈る所であつたがこの號限りその清らかな愛らしい姿をもう永久に見ることが出來なくなるのだ。余は詩壇のために大に惜むのだけれど致し方はない。免る可らざる運命なのであらう。

それで余は『銀鈴』の過去に就て一二の感想を書いて終刊號に捧げることゝしよう。

先づ驚いたのは趣味の高い事であつた。我地方の詩壇の幼稚なのに比べて餘りに高尚なので中にはも少し程度を低くして多數の讀者を集

め多數の投稿者を滿足せしめて發展を試みたらよからうと言ふ人も居た。

散文には感服の出來るものが少なかつたが短歌に至つては材料が餘程精選せられて居て心地がよかつた。そして地方詩人の作を載せ地方詩壇の開拓に力めあくまで地方雜誌として活動したのは非常に好かつた。徒らに大家先生のお名前を並べる樣な態度が無かつたのも嬉しい。中頃まで非常に活動がめざましかつたがその以後やや不振の有樣であるのを惜んだ。

併し田舍雜誌で而かも純文學雜誌で三十六號までも生命を保つたのは實に感服の至りだ、主

幹河野君の骨折は言語につくされぬで有らう詩壇の好機會を捉へて起つた『詩人』も程なく已んだ。十年の歴史を有ち比較的堅き基礎に立つて居た『明星』も消ゑた。雑誌―就中文藝雑誌の持續は困難なる哉。それも東京でその通りだ。東京といへば賣高が多い。田舎となると雑誌の價値は多くとも人は讀んでは呉れぬ。從ふて滅亡の外はないのである。

『銀鈴』が地方詩壇を覺醒した功績は何人も認むる所で此處に喋々を要せぬ事と思ふ。

以上はほんの追憶の一端であるが捧げて以て『銀鈴』の終刊號を送る。

花紅葉

山本碧帆

○

母戀ひて泣きし日の君わが側にわが歌ききてやすらかに寢る

七草の七いろながらちらがれぬ數のおもひ出つげもやりなむ

吉田櫻川

○

ああ今し黄金樞の音こそすれ曙ゆゑに我がわだつみは

芙淳の浦海士の戀草かきあつめいく代焚きけむ水くれなゐす

冬きたる落葉ひそ泣く山峡にかめきのこゑす
吹くか木枯
北海の氷山を見てわが乙女いささかながらお
それ給はむ
青き月わかき女のむくろをかのせし柩の夜の
街をゆく

○　菅原紅雨

冷かなる眼して君云ふ『何ゆゑに二人を戀すわ
れを惡むや』
『何欲りす飢ゑたる眼もて群集の中に覓むは』『君
に似たるを』
十五人いと賢しらに占へる君が周圍の人な信

じそ
いま我は落葉の中ゆ一ひらの紅き花とり愛で
ぬる思ひ
秋の夕雲はおこりぬ卒然と安けき胸にいくた
びとなく
白き蝶君に寄り來むとばかりにあざむきたま
ふ人とおぼゆ
何宣らすいと嚴かに科人を嘖むごとくわれに
說く人
君戀し一念の火はかの空に星とてはりて寒く
かかれる
白き玉七つ捧げてわれに泣く少女を抱き朝寢

してまし
灰いろの雲の上にも思はずや君が瞳に似る星
あるを
なに物の強きちからぞいと易く心の石をかく
動かすは
うき人と君を怨じぬ慎まぬ少女の性とゆるさ
せたまへ

芳仙

◎

大風に鳴らされて居る鳴子かな
行く秋や案山子の蓑に夕日さす
さしてある五輪の墓の野菊かな

下宿屋の半日

疎髯子

昨夜遅くまで小説を讀み耽つた結果、今朝目の覺めたのは九時半頃。こいッ寝過したとは思つたが、さて起たとて別に大した要事があるではなし、殊に今日は幸ひ日曜だ、此儘悠然得意の妄想にでも耽つてと、火鉢を引き寄せ腹這ひになつて煙草を吸ふ。ふと枕元に帶封の儘の「萬朝報」のあるのに氣が附いた。下女がそつと置いて行つたのだらう。小口から念を入れて見る。新躰詩の三番目の分と、俚謠正調のはじめの分とが妙

に氣に入つた、全紙殘らず讀み終つてちよいと時計を見れば十時前五分だ。もうそろ〳〵起きるとせうと、蒲團をはね退けて仁王立に突起つた。不精々々に楊子を嚙へながら洗面場に行く。驚いたー洗面臺が滅茶々々に毀れて居る。何だこのざまはと思つて居る所へ、宿の亭主が遣つて來た。

「お早うございました。ご覽なさい、こんなにてこが毀れました。ねへーーー。」

「どうしたんです？」

「ねへーーー。昨夜五號に泊られたお客さまが貴方……」

「はーわ、さうするとあの別嬪さんかね、十九か二十ばかりの。色の白いぽつてりとした、そして身なりの可い、それがまた何うして？」

「たいさう能くご存じですね。いねなに、今朝あのお方が、お面をお洗ひになるとき、手巾を何かが前方へ落ちたさうで、それをお拾ひにならうとして此れへ上られたので。ねへーーー」

顏を洗つて居間へ歸つた。下女が待ち兼ねて朝飯を持つて來る樣子、例によつて襖をすーッと明けた。

「お早うございます。」

と眞面目腐つて挨拶をする。不相變美くないで

面相だ、こんな双に給仕して貰うよりか寧ろ貰はない方が増し位だが、まさかさうとも云へん。

「あんまりお早うもないよ。イヤこいつは可かん、おい巨燵に火がないよ、早く持つて來ないか、寒くて堪らん。昨夜方入れた、たつたあれ丈けの炭で今まで持ち切れると思ふかい。」

下女は周章た顏をして降りて行く、箱段をメッキ〳〵と大象が歩るくやうな音をさせる。どうもこの宿はケチで可かない、火位たんと入れて呉れたつて身代に關はるやうなこともあるまいに等と思つて居るうちに少しばかりの火を火斗に入れて持つて來た。

「今朝は、あのもう彼方にも火がございませんで……も少しすれば出來ますが……。」

「ないッ。」

と云つた切り箸を取つた。膳の上は實に千篇一律だ、おまけに飯も冷い、が併しこれは自分が朝寢の報いで仕方もない。一言半句も物を言はず、ソコ〳〵に二三杯平げて膳を押し遣つた儘、見向きもせずそのまゝ昨日さる人から送つて呉れた「女學世界」と「婦人世界」との口繪を見る。新婚夫婦の寫眞がイヤに澤山ある、グイと癪に障る何故に癪に障つたかは自分にも解らん、また說明する限りでもあるまい。

本月の『新聲』に目に附く流石奇麗な雜誌だ、前を十頁ばかり讀む。退屈になつて、あーッと欠伸をする途端に下女が火を小澤山に持つて來た、そして、

『あの、郵便が參りました。』

と差出す一封の手紙、一寸表書を見て、『はゝあ、あれからだな』と直に封を切つて讀み下す。

『おい君、しつかり閉めて置かんと可かんぜ。』

と怒鳴る。下女は立ち戻つて默つて閉め切る妙に種々の事を書く女だ。僕なら『君無事か、予息災なり』で濟ますべき所を、イヤ書かれたりな、山鳥の尾のしだり尾の長々と、さて其の次に、ヤレ浮

世が厭になつたの、情けない氣がするの、女と云ふものは詰らんものであるの、何であるの彼であるのと繰り返し繰り返し並べ立てた。最後に直ちに返書を呉れろと言つてある。何も問ふてもないに返事も糞もあるものか、馬鹿なッとつぶやきながらも大切に捲いて、机の引出の底の方へ仕舞つて置く。

——完——

古意四首

佐藤芝峰

美人在　在江南　江南不可至　烟波只澹々
遠渚雁影亂　聲々呼侶長　或宿蘆花雪　又迷
蓋花霜　江南不可適　悵望日三夕
阿母在　在北堂　北堂不可至　雲山只蒼々
寒雨連遠渚　孤雁影冥々　夕陽紅一綫　迷離
照前汀　北堂不可適　悵望日三夕
菱花在　在汀洲　汀洲不可至　白鷗只悠々
南風清歌起　新粧艶於花　欲折多綠刺　躊躇
水之涯　汀洲不可適　悵望日之夕
葛■在　在南山　南山不可至　白雲只往還
郎是如喬松　妾身似葛■　葛■憑喬松
扶葛■　南山不可適　悵望日三夕

私言

濱田にて
前田木風

○翠瀲兄からの賀章の末尾に、銀鈴も三十六號を以て終刊しやうと思ふから、何か懷舊談一篇を書けよとのこと。

○銀鈴は初號から悉皆とりまとめて、故郷の書笈に納めてあるので、今一部たりとも見る事が出來ぬ、よし有つたにした所が、無論まとまつた秩序ある、回想錄ちしいものは書けない。

○だからして銀鈴を見る事が出來ないのをせめてもの幸、眞の僞らざるそして純なる眞情の

あふれ出た一塊の思ひ出とでも、見て戴けば此の上もないことである。

○自分も銀鈴誌上を汚した古い人の内には是非一束にせらるべき者であらうかと思ふと、内心窃に快感を覺ゑる、其れと共に一層切實に恥しさと云ふ者のつきまとふて來るのを感ぜずには居られない。

○新凉會に入會したのが多分三十七年頃であつたらう、それから直に洋紙一枚刷りのうすッぺらな銀鈴一號が出た、三十首餘りの和歌も極めて粗雜なものであつた。

○初號の餘りに粗暴であつたと云ふことゝ二

號三號と號を重ねるに從つて、火急に著るしく發展したと云ふ、この二つの點に於て、一號二號は殊に印象が深く、今も尙眼の前に見ゑるやうな氣がする。

○其の頃は福田紫雲氏や藏田二葉女史や奥原碧雲氏の和歌があつたやうに覺ゑて居るが、其の他の事は全然記憶に殘らぬ。

○間も無く川上櫻翠氏の寄稿を始め、苟も地方作家として一人たりとも、銀鈴紙上に稿を寄せぬ者はなかつた。新凉會支部といふものが諸方に出來、各自の作は多く松陽新報紙上に發表され、

○號を重ぬると共に益々隆盛に赴き、純然たる文學雜誌と成つて、島根歌人の血を湧かしめたのは疑ない事で、然も歌壇に貢献する所多大であつたのは、彼の松陽紙上に掲載せし新派和歌評釋の如きでも、其の當時の一般の傾向が知られやう、實に此れが全盛を極めた時代であつたのだ。

○翕然として集つた多くの青年詩人は、いくばくもなくして其の影だに見せず、新たなる作家によつて、爰に又一時銀鈴紙上を飾つた時もありはしなかつたかと思はれる。

○文學雜誌と云ふものゝ多くが、小品文や一口

噺や行らぬ小説で以て、其の紙面を埋て居る中にあつて、舊思想にかぶれず、忠實に眞摯に、絶ねず新思想を追ふて進まうと、專心努めて居たと云ふ事は十分にみとめてよからうと思ふ。

○其れに就ても多年銀鈴に勞苦を費した翠激氏に其の勞を飽くまでも多とせねばならぬ、自分も古く銀鈴にたづさはつて、教をうけた一人である以上は、決して銀鈴と云ふ二字は忘れない。

○友人がまゝ翠激氏最早や老いたる哉!!と云ふ事があるが、其の度ごとに自分は何時も云ふ、氏は決して老いはせぬ、慥かに銀鈴の爲に餘暇

が無いのである、而して又忠實な讀者の一人をあると。

○明星も百號で廢刊して、斯界から惜まるゝと同じく『銀鈴』の花々しき最後をとげるのを惜むのである。が併し事爰に至るも或は翠瀧兄の爲には、喜ぶべき事であるかも知れぬ、世人は今後の兄に一層希待する所であらう、否自分もその一人である。

○銀鈴の沿革とも云ふ可き詳しき事は、數年來身親しく其の任に當つた翠瀧氏が書かれる事であらうから、今くだ〳〵しくは云はないが何れ後日改めて何かに書く事が屹度あらうと信ずる。

○談が横道へ外れて回想録とも懐舊談とも何方つかずの斷片的の無趣味な座談に流れて、限りある紙面を潰したのは、讀者諸兄に對して誠に慚愧にたへぬと云ふことで一先づ筆を擱く

……（一月十三日夜）

涙

菅原紅雨

つねに我が心はさびしうつくしき侮に泣けとは人も強ひぬに

かくてわれ再び人を戀せじといとたやすげに
語るひと見ぬ

くろがねの大き柵結び相見るを防ぐと人の罵
るをきく

いまばかりゆるし給へと君言ひぬ死をも辭さ
ぬ誓言はあれ

吹雪して寢ねられぬ夜はおもふかなかかる疾
風に君や乘り來む

銀鈴と河野君

入澤　凉月

「拜啓爾來御無沙汰御免被下度候、乍突然銀鈴一月號(三十六號)にて一先づ終刊と致候。從來の御交誼上、一篇の懷舊談又は作篇、一月十五日までに御送稿特に願上候云々」

此書面を手にした僕は何とも云へぬ感に打たれた。何故にしかく痛感したか僕は是れを述べて銀鈴を送るの詞となし、寧ろ終刊の喜ぶべきを言ひたいのである。

銀鈴は河野翠激君の經營になつた地方雜誌で

既に三十五號が出て居る。其長き生命を保つた銀鈴は地方文壇に其存在をも疑はれてゐたのは基礎の少なるは勿論土地の狀況の如何に依つたことであらうと思ふ。存在をも認識されない雜誌に骨折り損をするの必要はない、此の意見は山鳩の旭晃もいつたことであるが、吾輩は第一に此論者で河野君には隨分なる敬意を拂つて居た、而し吾輩は如上の意見を持つて居た。素より興廢あり變遷あつた銀鈴の歷史は飾るべき美談があるであらうが地方雜誌としての銀鈴は甚だ微々たるもので毫も河野君の隱れた主義が見ゆなかつたのは遺憾千萬であつた。

短歌を中心として眞面目に研究して居た態度は感ずべきことで今日迄繼續した事に關しては宜しく其勞を感謝せねばなるまい。雜誌の經營ほど難事はないから、地勢狀況上不便利を感じた事も多かつたであらう。

興廢常なき現今の地方文壇は絕ゆず不忠實なる夥多の雜誌を迎へて居る、十號とその生命を保たぬ地方雜誌は河野君の薄ぺらな銀鈴に如何なる面目があらうか、河野君は地方文學の鼓吹に就いては餘程盡力された人である、嘗ては備後に內田枯竹が『玄聲』といふ雜誌を出して居た時に多大の援助を與へたことがあつた。即ち

地方文壇に關しては一方ならぬ身を入れた人である。

吾輩は今や地方文壇に銀鈴を送るに際し悲しく思はれるが寧ろ此の廢刊を賀すべき一人である。僅か十一二頁の銀鈴は一時間も費さずして編輯も出來る、又出版費とてもそう大したものではないがこの微々たる銀鈴にも確かに一つの生命があり、盡すべきの任務があり且つ河野君の血と涙が濺がれてゐたことは正に沒すべからざるものである。地方文壇に銀鈴のあるは廢刊した所が何等の影響もない、而しながら吾輩は河野君の精力と熱心を感謝し、再び銀鈴の地方文壇に現はるゝの日を期待し切に河野君の壯健を祈るものである。妄言多罪（一月十七日夜）

六首

河野翠激

女いふ大和に入らむ男いふ紀伊にかへらむ趣の可し

丘の家はるかに見ゆつ車曳きわれらは急ぐ町の繁華に

ひと時もわすれ得がたき戀もろに否々胸に殘れるはなし

よろよろと足もと知らず往くひとも還るも空をのみ見てぞ過ぐ

紙折るになれし人ゆゑ巧妙にあちゆるものを小指にて爲る

赤き旗屠手が小家の上に立つ黄色にかざる落日の前

卷末語

（翠微生）

◎本誌銀鈴は本號を以て終刊と致候。小生微力の經營が遂に第三十六號に達し候事思へば多少の感なきにあらず候。

◎然れども、茲に終刊の紙上に於て漫に女々しき繰言を述べむは如何にも大人げなき業と存じ候まゝ、今は早や、何事も默して語るまじく候。

◎特に感謝し置き度きは、諸君が忙中の清暇を以て、強いて小生の請を容れ、幾多の玉篇を寄せられたる一事に候。小生は謹で敬意を表し候。

◎本社に寄贈せられたる新刊のうち、小笠原白也氏の『嫁ヶ淵』後篇は、曩に松江の『山陰新聞』紙上に於いて妄批を呈し置き候に就き今

は唯奥原碧雲氏の『島根縣遊覽案内』に對し一言を寄せ度候。同氏は嘗て『島根縣名勝誌』を公にせられたる經歴あり、其編著の手際に就ては改めて贊するを須ひずと信じ候。内容は先きの島根縣名勝誌と大差なきも簡にして要を得たる、彼れ、是れに如かずと存じ候、躰裁はポケット用として極めて輕便、切に縣下遊覽者の携帶を勸め候。

◎本社々費及び誌代に剩餘あるものは、既に夫々御返金仕候。其不足せる諸君に在りては、お序での節御送金の程願ひ上げ置候。

◎從前本社に寄せられたる詠草又は玉稿は、今尚ほ鄭重に保管致居候、追て或ひは他の新聞雜誌に發表するやも計らず、諸君の御諒察を請ひ候。

◎終りに臨みて諸君の健康と福祉とを祈りて止まず候。敬具。

明治四十二年二月五日印刷
仝　年二月十日發行
定價本號金貳拾錢
島根縣邑智郡田所村大字下田所七三二
編輯兼發行人　河野岩雄
仝　縣飯石郡赤名村大字赤名八二一
印刷人　木村柳三郎
印刷所（右同所）赤名活版所
發行所　島根縣邑智郡田所村　銀鈴社